

# 《1》都市構想を立案する意義 創造都市横浜構想は未来社会の起点

### 1 都市とは何か

都市とは何か。都市の現実とは何か。まちづくりアーバンデザイナーとして参じた30年間、常に考えてきた問いである。都市とは人工のものArtの大成であり自然Natureと対峙する存在である。都市の成立は軍事的な意味や経済的なそして宗教的精神的な意味からも説明ができるが、存続には絶え間ない革新や再生を行う創造力が不可欠である。その創造力の源泉はかくありたいという「夢」から生まれるものである。言ってみれば人々の「夢」が凝縮されて都市を生み出し、また「夢」を喚起し生み出すのが都市である。それを都市の文化といっているのだから。

数千年も続いてきた都市の文化は、無数の夢に形を与えようとする挑戦の歴史そのものである。都市が人を魅惑するのではなく、人々の夢が都市に人を惹きつけてきたので

ある。夢が創造されていく場、そして夢が実態となる過程が都市であるが、近代は夢が欲望におきかわり暴走する都市となりさらには人々の夢を制御する都市へ、そして今日は夢を失わせる都市へと変容しているのである。つまり人々が夢を描けない都市となり、都市は夢を断片化しているのである。

### ① 都市と人間性

夢を持つことができないとすれば充実感や楽しさという感覚も生まれない。技術の進歩による経済の成長や物質生活の充足ではなく、安定や安心という停止的な夢もあるはずであり、グローバルイズムに対してローカリズムが、ファストに対してはスローな文化が評価されつつある。文化が人間の手に戻りつつある。

10年ほど前にブータンで集落調査を行った際に、経済成長とは異なる国家目標を掲げ資本主義は一つの道具にすぎないという考え方に

会った。1976年に前国王がGNPよりGNH (Gross National Happiness / 国民総幸福) を優先すると提唱し知られた小国である。標高3000mを超える村々、車をおり数時間も歩く村、ヒマラヤに続く山並みと棚田に囲まれた美しい村(写真1)。道路や電気など基盤はまだ遅れているが、教育は無料で英語でという徹底した人材育成など国づくりはゆつくりと着実に進んでいた。時間をかける発展。人間を尊重する発展。自然、農、食文化や芸能そして仏教の教えが支える開放的な共同体がしっかりと持続している。幸福のエンジンは生活と文化を楽しむ村人と子供たちの姿である。2005年にブータンで初の国勢調査が行われたが、『幸せ』という問いに97%が『幸せ』と答えた。70万人の共通の目標ともなっている。

現代の都市は複雑化し「総体」の理解は難しい。現状を変えたいという意思は多くの

人に共通の考えであるが、どう変えるかという目標や実態においては統合する概念がない。しかし、議論や行動なくして新しい都市の状況に到達することはできないわけで、議論と行動の牽引役となるのは「都市構想」であると考え

### ② 総体を議論する構想

近代の都市構想の代表としてル・コルビュジエ(注1)のそれをあげる。「300万人の現代都市(1922)」、「パリのヴォアザン計画(1925)」、「輝く都市(1930)」などの都市構想を提示した。中世都市を土台とした近代都市の過密化による衛生面や環境面の問題を「住む、働く、憩う、移動する」という視点から統合的に解決する機能配置や建築や緑地の形式を与えた。都市には中心が生まれオフィスという新しい施設が生まれることを予見し、モダニズムという思潮を牽引した。今日の都市

執筆

北沢 猛

東京大学教授  
横浜市参与・UDCY横浜アーバンデザイン研究機構代表委員



写真1 ブータン王国シンカー集落の広場

(注1)

Le Corbusier (1887年～1965年)、近代都市の理念は1933年のCIAM(近代建築国際会議)で議論された「アテネ憲章」にまとめられた。

(注2)

ル・コルビュジエ(1924)、「エールバニズム」(樋口清訳、1967年、鹿島出版会)

の混乱をまねいたという批判もあるが、ル・コルビュジェは、「現代生活は使いつくした力の回復を必要とする。都市を変革するためには都市計画（ウルバニズム）の基礎原理を探らなければならない。」と1922年サロンドードン

又展で300万人の現代都市（1922）の透視図にそえた声明に書いていた。都市構想が単なる空想主義や未来主義ではなく「私は時代を信ずる。規則を与える図式を越えた未来のために、個々の場合の困難な展開の中に私は時代を信ずる。」（注2、図1）としている。構想する行為は「問題をたて、整理し、構成し、持続させ、そして欠くことのできない叙情を思うこと」であるとして「叙情」だけが心を高揚させ行動に駆り立てるとしている。

## 2 都市構想の系譜と横浜

横浜は時代の要請を受けて、都市構想を練り実践してきた都市である。近代都市として新しく創られた横浜は、都市化と膨張、それに伴う問題や災害などを経験し、成熟都市への過程を歩んできた。1859年の開港以来、150年間の都市形成史を俯瞰する時、横浜の都市構想と実態は、まさに日本の近代史

を表しており先導する存在であったことがわかる。開港後の50年毎は時代の節目と転換期にあたり、社会の行方や未来をめぐる議論と都市の構想が描かれた時でもあった。

開港50周年1909（明治42）年は、都市化の始動や都心の稠密化、衛生問題など環境悪化、居留地解体と横浜経済の停滞、自治体経営問題、資本家と市民の台頭、民権運動、政治的混乱といったキーワードがあった。1903年に就任した市原盛宏市長（注3）は、『横浜市今後の施設について』という演説において構想の骨格を示しているが、1910年には横浜市設備調査委員会が『横浜市区改正にかかわる調査資料』として構想計画を描いた。港湾整備や工業地区指定と工場招致条例などの産業都市を構想し、一方で衛生地区指定に見られる環境改善という視点を示した。都市の「散開（衛生都市やグリーンベルト）」の構想もあり、三宅磐（横浜市顧問）が支援した。

開港100周年1959（昭和34）年は、高度経済成長と急激な都市膨張や人口増、交通問題や公害問題、3割自治、政治的混乱などで語られよう。飛鳥田一雄市長（1963年就任）は『横浜市市政方針』において市民参

加と自治体改革を提唱し、総合的な都市づくりと市民が理解できる都市設計、身近な環境を改善する街づくりを考えたい。1965年には新しい都市構想を描き『横浜の都市づくり』として出版しているが、都市問題調査会（高山栄華他）などの支援と浅田孝と田村明らの環境開発センターが立案にあたった。都心部強化事業（現在のみなとみらい21などの中心部の再編）を含む六大事業と公害防止協定や土地利用計画と規制、宅地開発要綱などの都市成長を管理する構想で、分化した都市計画を総合化するものであった。理念としては「大都市の生と死」（1961年J. ジェイコブス）など人間を中心に捉える都市構想への転換があり、複雑化し巨大化する都市については「東京計画1960」（丹下健三 図2）など、ものや人の移動や情報という視点が加わり表現や計画の形式も大きく変化した。

加と自治体改革を提唱し、総合的な都市づくりと市民が理解できる都市設計、身近な環境を改善する街づくりを考えたい。1965年には新しい都市構想を描き『横浜の都市づくり』として出版しているが、都市問題調査会（高山栄華他）などの支援と浅田孝と田村明らの環境開発センターが立案にあたった。都心部強化事業（現在のみなとみらい21などの中心部の再編）を含む六大事業と公害防止協定や土地利用計画と規制、宅地開発要綱などの都市成長を管理する構想で、分化した都市計画を総合化するものであった。理念としては「大都市の生と死」（1961年J. ジェイコブス）など人間を中心に捉える都市構想への転換があり、複雑化し巨大化する都市については「東京計画1960」（丹下健三 図2）など、ものや人の移動や情報という視点が加わり表現や計画の形式も大きく変化した。

### ① 近代都市の課題と転換―空間から統合的に捉える

都市と経済など諸活動を統合する構想が近代都市には必要であったが、人間を囲む環境や空間から総合的に都市を捉えることは、先進地であった欧米においても100年程の歴史である。集中と

混乱の中から、工業都市構想（1904Tony Garnier）や田園都市構想（1898E.Howard）が生まれ、レッツワースなどの郊外像がそしてスカイスクレイパーの都心像が形成された。工業化の時代は構想が盛んに創られ、政治や経済そして政策を動かしてきた。それは産業と空間もまだ人の手の中にあつたことを物語っている。

横浜市原盛宏は、『横浜市今後の施設について』において、都市問題を引き起こした要因を国の政策にまかせた受動的な市政運営にあるとして、「自動的即ち働きかけの発展」を目指すべきとして、貿易都市から産業港湾特に工業都市への脱皮を提示するが、一方で市民生活の向上のために衛生施設、教育事業、慈善事業さらには図書館や美術館、公園の設置とその事業経営を提唱したのである。

1909年、横浜市の人口は40万人を超えたが、重税や失業、公害に悩まされ、改革を求める市民運動も起こった。（注4）都市構想に影響をもったのが三宅磐。大阪朝日新聞において都市問題と都市経営を論じ、1910年に自らの都市構想をまとめた『都市の研究』を出版している。1908年には横浜市顧問に招聘され、欧米の動向、

（注3）市原盛宏、第四代横浜市長。熊本出身。京都同志社からエル大学へ進学し、帰国後同志社で教鞭をとり、その後渋沢栄一の知遇を受け、日本銀行や第一銀行に勤務。横浜市長の要請を受けた時は第一銀行横浜支店長。

（注4）横浜市会1988「横浜市の百年」横浜市百年史刊行委員会 P.34-35

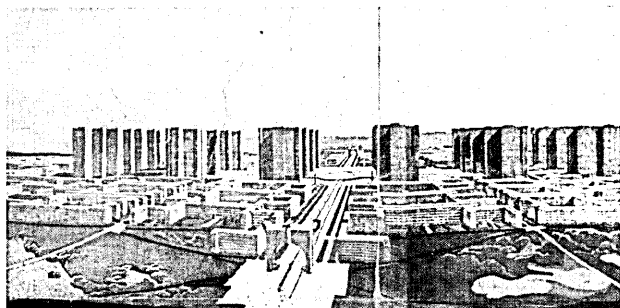


図1 コルビュジェ「300万人都市」(透視図)



図2 東京計画1960、丹下健三と東京大学丹下研究室（出典／「東京計画1960～その構造改革の提案」1961、建築文化、彰国出版社）

例えば田園都市構想など都市構想を踏まえて、「都市の整善」により「安静や健全、健康」に対応すべきとした。その実現には「都市施設の計画と経営」、「人口の散開」（田園都市）、「財政再生」を提案し、さらに市民の責務と参画、普通選挙による「市民の全体をして市政に尽力せしむる」とした。三宅らの都市構想が20世紀初頭の「都市拡張」の課題を整理し施策をも提示していたことに注目したい。（写真2）

この時代は都市を形成していく主体も為政者と生活者という単純な主体構成ではなく、資本家層や官僚層、中産階級層などの新しい主体を生みだしていた。市原市長に始まる横浜独自の方針は横浜財界や政治的な支持を得て、新港埠頭などの港湾整備や京浜工場地帯の造成を進め、都心の骨格を完成させた。

## ② 現代都市の課題と転換—人間と空間から統合する

高度成長時代にかけて都市は急激に膨張し制御できないものとなり、都市構想も単なる政治的なスローガンとなり力を失った。都市規模の問題だけではなく、社会の複雑化と経済のグローバル化が都市の把握を困難とした。そこにアーバンデザインは

新たな都市づくりの方法として登場し、1960年代のアメリカで理論構築がなされ70年代には早くも実際の都市に適用された。構想や計画が、建築と土木、都市計画と分化し、個別の制度とシステムが空間を支配することとなった。空間の再統合を図ることがアーバンデザインに与えられた役割であった。

近代都市計画批判としては、例えばクリストファー・アレクザンダーは『都市はツリーではない』より、従来の単純なヒエラルキーでは都市構造を捉えられないとして、複雑な要素の相互関係であることを明らかにした。J. ジェイコブスが提示した都市の多様性と複雑さという本質、特質と合致する発想であり、今日の社会空間や都市構造を分析するネットワーク理論の観点も提示されていた。

都市構造をどう読むか、そこに新しい都市構想が生まれるわけであり、メタポリズム（注5）の理念が影響をもった。横浜の都市構想や都市づくり、都市デザインを主導したのは、その理論構成の中心にあった浅田孝らであった。1964年には浅田らにより都市構想が調査され「六大事業」（後述）などその後今日に至る都市づくりの基本路線が創られた。（注6、図3）

田村明は、構想における未来予測は不確定なものであり「フレキシビリティを予測するのが当然で、全く固定したプラン通り実行させることの方がおかしい」（注7）と、まず指摘する。構想計画を否定するのではなく、国や自治体の制度的な欠陥、計画が計画として完結するような実行手段の問題の上になたて、実践的な計画そして市民への浸透、理論的な根拠さらには都市計画を人間の技術として高い地点に昇華させる視野を必要とした。

同時代のアメリカではE. ベーコン（フィラデルフィア都市計画局長）、あるいはD. クレーン（ボストン再開発局長）らが、都市の成長や再生の自己能力を把握した上で効果的な介入が必要であると主張し、「全体を捉え、そのすべての部分からコミュニケーションの様式を顕在化していく過程」が都市デザインであり、その目的は次元の高い「公共的な価値の実現」であるとされた。ルイスマンフォードは「ばらばらに切り離された、標準化した型へのこだわりは、都市のもっている価値や生活、文化を破壊する。人々のところに計画図がある。」と指摘した。

## ③ 横浜「都市づくり構想」

### 1965の評価

1965年に横浜市は浅田や田村らの検討を受け飛鳥田一雄市長のもと「横浜の都市づくり構想」（注8）を発表する。横浜市の都市形成を踏まえ、「伝統的、歴史的な遺産としての港都」、「内部的な所得源としての工業都市」、「外部的な東京からの人口圧力による住宅都市」という三つの特性に加え、新たな目標として「港を中心に貿易およびその関連の業務地区、東京と異なる特色ある国際色ゆたかな消費センター、国際的交流を行う文化センター、事務工場群等、第三次産業を中心とした国際文化管理都市」という第四の目標を定めている。

横浜市会全員協議会の記録をみると、飛鳥田市長自らが説明にたち都市構想と中核となる六大事業（図4）をかなりの時間を割き丁寧に説明していた。「人間のための都市としてつくり変えなければならぬことは、もはや言を待たないことであろう」と切り出し、従来の3つの都市の性格を「有機的に結合し新しい横浜の性格をつくる」として、「大きな構想と志」の上になたて、「なしえるものを取り上げて完成をいたすこと」によって全体を推進する力をつくる」という意味で、6つの事業が戦略的なものであることを強調

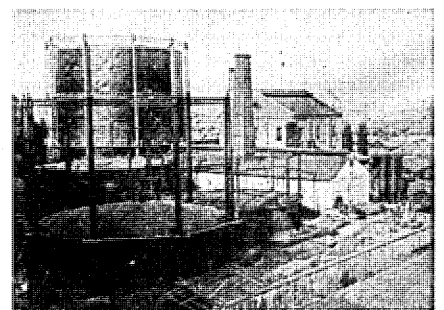


写真2 [我が国唯一の市営革新事業・横浜瓦葺局]（『都市の研究』三宅馨著、明治41年、實業之日本社）三宅は市営事業を都市経営に効果があると評価  
調査季報 vol.163・2008.9 ■ 04

（注5）メタポリズムは1960年代に建築家や都市計画家の間で議論され、従来の固定した形や機能から成長にあわせて変化する生物や生命の仕組みが将来の都市や文化に必要とされた。1960年に「世界デザイン会議」を主宰した浅田孝をはじめ、菊竹清訓、黒川紀章、大高正人、栄久庵憲司、栗津潔、横文彦と建築評論家の川添登が「METABOLISM/1960」都市への提案を発表、世界の主導権を握った。

（注6）「横浜市将来計画に関する基礎調査報告書」横浜市からの依頼を受けて環境開発センター（浅田孝主宰）が作成した報告書で六大事業などの横浜の都市づくり構想の草案となったもの、1964年12月、P.23

（注7）田村明1971年「プランナーの必要性とその活動」（雑誌SDの横浜特集「自治的地域空間の構造化」鹿島出版会P.20・32）

（注8）「横浜の都市づくり」1965年10月横浜市刊行。A4版72頁で図版写真も豊富。有隣堂書店において300円で販売した。

した。また「これは私たちの試案であり構想である。したがって、この構想は確定されたものではない、今後十分に皆さん方と一緒に討議し、市民とともに語り合って我々はその実現を期していかなばならぬ」としている。飛鳥田市長は、財源問題に関する質問に、市民税には手をつけずに、また銀行や民間資本にゆだねるなどと資金、つまり都市経営の重要性を答弁した。

六大事業の構想は、生産優先主義から生活中心主義への転換を行ったことにあるといえるだろう。「工業化が都市開発の至上目標である時代はすぎた」として、工業は横浜経済に大きな比重があることは肯定しながらも、成長の調整や環境問題に取り組みべきという考え方を明確にしている。すなわち、急激な都市化によって変化しつつある横浜市が都市本来の機能への回復と都市生活における人間性の優位をめぐすことを宣言した。ベッドタウンとしてではなく、独立した国際文化管理都市として自律的に成長してゆくことを目指したものであった。

都市経営という自治体の改革や組織の活性化という視点も含まれ、横断的組織としての企画調整局の設置などの改革や民間の資金や発想の導入

といった様々な主体の関係づくりに焦点を当てたことも評価できる。

1965年の都市構想は、作成されてから40年が経ちほぼその形が具現化し今日の横浜を支えている。その目標や構想、実現の戦略が有効であったことを示している。

### 3 創造都市構想から新しい都市構想へー環境と空間の統合

今日、都市は物理的にも社会経済的にも成長拡大から非成長そして縮小へと向かい、資源や環境という生態系維持の制約から考えれば、近い将来において先進国やアジアの都市においても基調となる事象と課題に直面している。また私たち自身の日常生活にも、従来の医療福祉をはじめ公的なサービスや拡大した居住地の維持保全についても新たな課題に直面している。経済的な成長や拡大、発展という目標を脱する新たな価値を求めており、おそらくは新しい生活の形と社会のシステムを創造していくことになるのである。

成長という価値は近代以降に生まれたもので、人類の進歩や国の発展から都市の開発、生活の経済まで社会全体の支配的な概念として定着し

た。時間とともに成長があり、発展とともに時間が流れる。停止や停滞を許さない価値はやがて人間を阻害し社会を阻害してきた。また、この発展主義を起点としグローバルイズムが情報化社会とともに世界を一元化し、世界システムとも言える経済社会形式が完成されたかのように見えた時代であった。しかし、実際には一元的な発展主義が、環境の破壊と格差の社会をもたらし、人間の存在が見失われ精神的な貧困や閉塞感が増大してきたのである。

このような状況に対して国際機関や大国や多国籍企業が果たすべき役割も大きい。これを脱する価値の創出は小さな国や都市や地域にあると言える。未来社会は都市や地域から変革が起こりその構想が描かれていくのであり、横浜は日本の近代を牽引してきた都市で変革の地としての経験もある。

今日の横浜を考えることは世界を考えることとなる。

#### ① 創造都市構想

創造都市構想とは1990年代後半からEUの諸都市において行われてきた都市づくりの新しい潮流を象徴する構想である。地域が達成する目的としての独自の「文化」、都市の文化が再び評価されてい

るのである。なぜなら都市は文化を核として、人が集まりコミュニティが生まれ、また観光やメディア、映画や演劇、美術やデザイン、娯楽など産業をも生み出すものである。都市が本来持っていた力を再評価する構想である。

実質的に縮減の時代に入っているにもかかわらず、欧米も日本もいまだに「経済成長の神話」から脱することができず、独自の風土や文化に基づく価値、それぞれの地域の価値を再評価し、新たな目標の設定が急務となっている。例えば横浜でも市民活動の中心となる都心部が空洞化し、2002年には関内地区



図4 横浜市六大事業の位置図 出典／『横浜の都市づくり』1965年10月横浜市

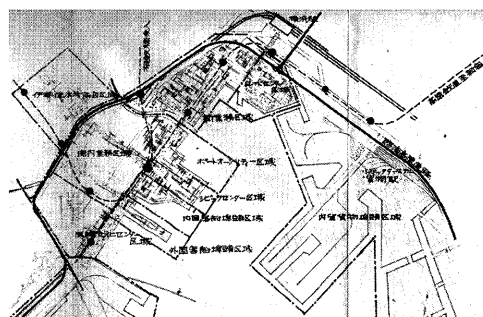


図3 新業務地域開発計画全体図(都心部強化事業のみと現在の21などの元となる計画)

出典：『横浜市将来計画に関する基礎調査報告書』1964、横浜市、環境開発センター

でオフィスの空室率は14%を越え衰退傾向が見られ、マンションの乱開発を誘発するなど、独自の空間を失いつつあった。都心部再生の目標に「都市文化」を加えるべく、2002年11月に市長の諮問機関として「文化芸術と観光振興による都心部活性化委員会」が設置され2004年1月の提言により「創造都市横浜構想」が策定されたのである。(注9)

この構想に基づき横浜の港町としての豊かな歴史や文化そして魅力ある空間を活かし「横浜トリエンナーレ」やBankART1929など多様な創造活動が展開されており高い評価を得ている。さらに市民が自ら新しい文化芸術にふれ参画し、「市民自らが創造的な可能性を引き出し、生活の質を豊かにする」と期待されるのである。都市文化の再生あるいは創造は、市民生活の目標となり都市づくりの新しい起点となるものである。なぜ都市に人や活動が集まるのか、なぜ産業が興り活力が生まれるのか。その答えは文化であり都市の持つ創造性にはならないからである。

## ② 創造都市に至る経過と議論

横浜における「創造都市」の意義論は、これより前、1986年に「創造実験都市」

をテーマとした国際シンポジウムに始まり、翌年には国際デザイン展の企画、そして横浜市長の『デザイン都市宣言』となったのである。「我々の環境は成熟化、情報化、国際化の社会に向かい急激な変化の中にいます。生活にあつては物質的な豊かさを求めた時代から、文化を求め、精神的な豊かさの創造をより重視する傾向が強くなつています。．．．創造実験都市として生活文化の総合的デザインを提案し、議論、研究できる場を提供したいと考えています。」として、これまでのアーバンデザインの蓄積を元に新しい都市と生活の像を描くとした。1988年に横浜アーバンデザイン国際コンペやアーバンデザイン国際シンポジウム、1990年にはバルセロナ&ヨコハマシティ・クリエーションや国際都市創造会議が開催された。「都市が人間らしい環境をもてるか、また文化や新しい生活を生み出す場となりえるかなど、都市の全体像を描く役割をもとめられているのではないかという意識の高まりがある。」として、都市変容の状況がレポートされ、音楽や演劇、デザインや人類学経済学、行政や企業とさまざまな分野、立場の意見の交換がおこなわれた。

何が、都市において尊重され

れえるべきか、またその主体はだれか、都市計画の必要性、市民の参加が持つ力、新しい発想と実験の必要性、アジアの都市と西欧的な都市計画論、制度や市場経済と都市文化の育成の場としての都市の在り方について、問題が提起された。

## ③ 都市構想への挑戦

1992年横浜アーバンリング展

アーバンデザインのもう一つの役割は新しく必要とされる空間を構想していくことにある。現在の都市を再編していくためには長い時間が必要であり、時代の変化に柔軟に対応し着実な積み重ねも求められる。現在の都市空間は、例えば道路や公園などの公共施設にしてもそのプロトタイプができてからすでに100年、詳細な基準が整理されてから数十年が経つが、逆に現在のニーズには合わないものも多い。成長型社会から低成長あるいは非成長社会へと転換している現在においては、都市空間特に公共空間に求められるものもすでに大きく変化しているのである。

1992年に横浜で開催された第1回ヨコハマ都市デザインフォーラム国際会議では「アーバンリング」という提案展を行った。横浜内港を取り

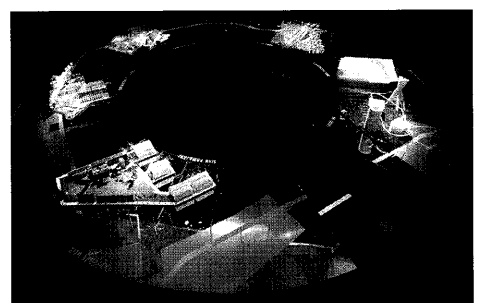


写真3 横浜アーバンリング構想1992 (横浜内港にプロジェクトを展開)

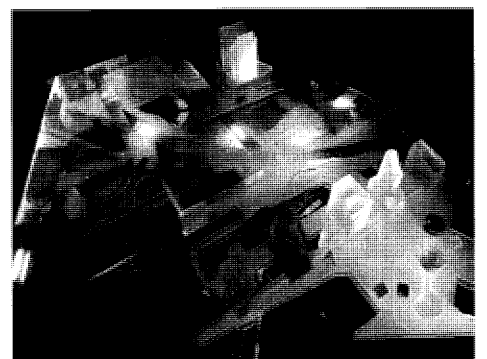


写真4 横浜アーバンリング構想: レムコールハスの中央市場周辺への提案

巻くエリアに新しい空間を提案するというもので、伊東豊雄、葉祥栄、高松伸、小林克弘、シー・ユーチエン、レム・コールハス、シエア・アルマジヤニー、ダニエル・ビュランらが構想を描き議論が交わされた。例えばレム・コールハスは、中央市場を取り込んだ提案をしているが、一般市民の活動時間とは全く異なる時間を使う市場の空間を、時間的にシェアする方法を提示している。同じ空間にいくつもの活動が重層していくという時間軸が革新的であった。(写真3) (写真4)

## ④ 議論の場としてのBankART1929

中田市長のもと、創造都市構想は数年で芸術家や建築家などの創造的な人材が集まり創造活動も活性化することが

できた。地域的にも臨海部の港湾施設の更新や再利用計画が進行しており、創造産業など産業との連関には課題があるものの、日常的な創造活動のエリア(創造界隈)は着実に都心地域に広がりつつある。こうしたエネルギーは、また様々な活動グループを生み着実に新しい社会基盤を構成しつつあり、どう新しい都市づくりにつなげていくかが次なる課題である。

横浜を舞台に都市の将来と都市での生活を議論することが、「創造都市横浜構想」の最大の狙いであった。その意味は①現代都市として横浜への理解を深めること、②横浜での創造活動を活性化し芸術を通して新しい夢や夢の創造をみることに、③広い意味での芸術家(創造家)の力を借りて夢の形を生み出すこと、④

人々の心身を通じた共感を生むこと、⑤それらの成熟によって都市を変革する意思を形成することにあると考えている。

横浜の創造都市構想は、創造力と文化再生の起点であり都市改革の出発点であり、都市を市民の手に戻す機会である。

このように考えたとき、創造都市プロジェクトの中心をなすBankART1929の果たしている役割は大きいと言える。旧第一銀行や旧富士銀行の保存活用であったことにも将来にむけた持続的な都市としての意義があり、港の文化を継承する横浜の空間、横浜のアーバンデザインを象徴する空間でもあった。(注10)

次なる段階は、都心臨海部に創造的な力、芸術家などの創造的人材、文化活動、創造や知をベースとした新しい産業などの集積と市民を含めたネットワークが形成されていくことが期待される。その意味でも集積の姿を描いたナショナルアートパークNational Art Part計画も象の鼻地区の再整備(2009年第一期完成)をスタートに加速していくことが期待される。(注11)

BankARTはアートセンターとして芸術(家)の支援や育成、発表の場としても新

しいスタイルで新しいシーン拓いてきた。しかしそれ以上に、BankARTやその周辺に集まった人やグループ、あるいはBankARTが媒介してできた公民学の広く自由なネットワークに大きな期待を持っている。創造都市構想の第二期において、BankARTが新たな役割を果たすことが期待されている。特に、これらの人や活動が、都市(的な現実)を理解し、批判し、転換することに繋がっているからである。

BankARTの自主事業には、「都市」「町並み」「歴史」「食」や「防災」「環境」と芸術をクロスさせる新しい思考を試みている。BankARTには都市構想の基礎となる議論や実験があり、新しい『公共空間』として展開しているのである。新しい都市への視野や視点が構築されている。

BankARTから様々な活動が広がり、横浜により多くの自由な活動の場が確保されて、自由に都市を議論し構想する場が増えて欲しいと考えている。「UDCY横浜アーバンデザイン研究機構」もBankART スクールから都市を再考することとなり、2008年4月にネットワーク型の地域シンクタンクとして活動が始まった。(注12) 都市の中心は文化である

が、特に必要なのは「自由」な議論と行動の場である。横浜は自由都市にあさわしい場であり、次世代が求める豊かな空間と時間が生み出される。集まる人々が夢を結実させまた夢を描くことができる。

来年は開港150年であり未来を考え議論するいい機会である。アーバンデザインの蓄積や横浜の資源や蓄積、経験をもとにしつつもあるべき姿や理想を描きだしていく必要がある。従来の枠組みや諸制度、慣行にとらわれない理念と発想で描き、長期にわたりこれを実現することで、将来の市民が楽しい生活を行える横浜遺産を形成すべきである。横浜の都市としての出

発地であり、現在のその中心となっている都心と港のエリアを考えることは、横浜全体の都市構想を考えるものである。さらに、郊外を含め横浜がもつ課題は多くの世界の都市が経験することであり、またアジアの成長する都市にとっては先駆的なモデルとなる。横浜を考えることは世界を考えることとなる。

次世代の都市像、横浜像をできるだけ具体的に描きだす、明確な理念・目標と横浜指標を整理することから始まるものである。

- ①人間としての発展/人間性、精神性、安心感や幸福感、人材や知財を涵養する都市
- ②持続可能な環境/生態系の多様性と回復、低炭素都市、自然を再生する都市
- ③公正で多元的な経済/知価と創造の産業、新経済を形づくる都市、ものづくり
- ④日本文化の継承と展開/伝統文化の再評価、風景や風土、遺産の継承、文化を育む都市
- ⑤多様で力ある社会/活動と組織の多様性、多様な個人の存在、国際性、多元都市

このような視点を持ち、長期に保存再生あるいは投資すべき新しい社会基盤を計画する。特に、都市に必要な人間性や創造性を育む文化や歴史、自然などの環境を正當に評価することから始めるべきであろう。

そして夢が描ける都市、夢が実現する都市に横浜が向かうことを期待している。(図5)

(注9)

「創造性」こそが都市の未来を拓くものであり、それを最も鮮やかに表現する分野である「文化芸術」を経済の活性化や魅力ある都市づくりにつなげ、都心部の活性化をはかるべき、として、将来像「文化芸術創造都市」クリエティブシティ・エコーハムの目標を①アーティスト・クリエーターが住みたくなる創造環境の実現②創造的産業クラスターの実現③魅力ある地域資源の活用④市民による文化芸術と社会のコーディネート、の4つとした。戦略プロジェクトとして①クリエティブ・コア②創造界隈形成③映像文化都市④ナショナルアートパーク、があげられ、3章で紹介する取組につながっている。

(注10)

都市デザインと創造都市については「④創造的都市空間をつくる」参照

(注11)

象の鼻地区再整備については「③①開港150周年に向けた都心臨海部の再生について」参照

(注12)

BankARTの活動については「⑦①BankART1929は「くさくさ」参照

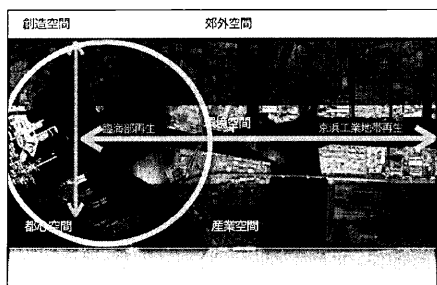


図5 都市構想2050(2008年、横浜内港から京浜臨海部にかけての地域を中心に新しい都市づくりが議論されている。)筆者作成